

【高気圧酸素治療エビデンスレポート】

「高気圧酸素治療 エビデンスレポート」の刊行にあたって

学術委員会：大浦 紀彦，川嶌 眞之，合志 清隆*，小島 泰史，
鈴木 一雄，芝山 正治，丹羽 康江，野原 敦，別府 高明
(*：委員長)

高気圧酸素治療 (hyperbaric oxygen therapy; HBO2) はすべての診療領域に関与しているといっても過言ではなく、この治療法は減圧障害を除くと補助療法として多種多様な疾患の治療に応用されている。しかし、臨床医学の専門性の高まりを反映して基本領域でも細分化が進められている現状では、HBO2の担当医が各診療領域を理解することは困難であることから、本学会のHBO2の適応疾患で科学的根拠を示した「診療の手引書」が必要となる。そのような背景から2009年に当時の井上 治理事が学術委員長として国際学会 (Undersea & Hyperbaric Medical Society) の”Committee Report”に位置づけられた「高気圧酸素療法における適応疾患の見直しと再編」が本学会から出された。

その後、HBO2に関連する臨床論文が数多く報告されるなかで、前述の手引書の改訂が求められたことから学術委員会で検討を重ねてきた。そこで委員会として主眼を置いたことは、手引書である「エビデンスレポート」ではHBO2の科学的根拠を可能な限り報告事実に基づいて紹介することであった。さらに、HBO2

の担当医だけではなく各診療科の医師に対しても理解が進むような配慮である。この点は「高気圧酸素治療エビデンスレポート」がHBO2を受ける患者側への説明にも利用されることで、医療者間、医療者患者間の相互理解が進むことを希望しているからである。

また、今回の「エビデンスレポート」の特徴の1つは、作成段階ですべての学術委員が各稿の校正に携わり、全委員の合意のもとで作成されたことである。この手法は委員からの提案であったが、これによって各レポートは適正かつ迅速に作成されることになった。HBO2の診療で重要性ないし使用頻度の高い疾患を優先して作業を進める予定であり、各種疾患のシリーズとして学会誌への掲載が進むように編集委員会とも連携をとってきた。

今後、学術委員会で予定していることは、診療手引書である「エビデンスレポート」を「診療ガイドライン」へ発展させることである。そのために関連機関への様式の打診をしてきたが、この作業も順調に進められるものと確信している。